

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education



巻頭言

総合科学研究所長
竹尾 利夫
TAKEO Toshio

本学園はまもなく創立百周年を迎えます。歳月を貫いて流れる建学の精神は、半世紀の伝統をもつ総合科学研究所においても結実の度を増してきました。本学では、学生の主体的な学びのために、地域社会の中で体験活動を行うことを支援しています。大学での学びを地域社会に活かすことが求められているからです。家政学部食物栄養学科の地域の男性向け「料理教室」のアシスタント、文学部児童教育学科の子育て支援活動「たち」の親子集会などがそうです。短期大学部生活学科の学生が中心となって企画運営する地域のミニ文化祭「春待ち小町」は、既に4回を数えました。本研究所の特色ある活動「開かれた地域貢献事業」も、そうした学生参加型の地域貢献への取り組みとして好評を博しています。

特に毎年実施している名古屋市瑞穂児童館及び瑞穂保健所との交

流事業は、保育・教育・栄養・健康等の幅広い分野で講座を展開しています。今年度も学内応募の中から特色ある企画が運営委員会にて採択され、まもなく講座が始まります。いくつか紹介しましょう。保健所との交流事業「若返り教室」の愛称で地域のお年寄りに親しまれている講座では、本学教員指導のもと認知症・うつ病対策を支援する企画が実施されます。受講は65歳以上の高齢者が対象ですが、これまでも学生との交流を通じて、「気分が若返った」といった感想をいただいているのは嬉しいことです。また4年目を迎えた児童館との交流事業では、12月のクリスマスイベントを中心に10月から来年3月まで8講座を予定。児童館職員や本学教員のみならず学生達も数多く参加する講座を実施します。

また、本研究所の根幹をなす機関研究では、「大学における効果的な授業法の研究」が新テーマ「学士力育成のための教育方法の検討」に入りました。これは現在の大学教育に求められている「学士力」育成のための実践的研究です。大学教育の質を保証する、具現化に向けた研究成果が期待されます。さらに機関研究として幼稚園・中学校・高等学校での教育に関する各取り組みは、本研究所と連携して研究会を重ねて着実な成果をあげています。本誌には、そうした研究所の活動報告と紹介を掲載しております。今後とも本研究所の活動に一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成23年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂保健所「若がえり教室 キラキラコース」を終えて

瑞穂保健所では、認知症やうつを予防するための教室を「若がえり教室」として実施しています。この教室の参加を通して、毎日いきいき・わくわくと暮らし、認知症を予防する方法を考え、最後まで自分らしい人生を送っていただきたいと考えています。

名古屋女子大学と教室を開催させていただくのも3回目となりました。平成23年9月～平成24年2月の6日間に、60代から80代の男性7名、女性24名の方が参加されました。回を重ね、口コミも広がっています。「また参加したい!」などの声が聞かれました。介護予防を始めたいが運動は苦手という方にも大学ならではの多岐に渡るアカデミックな内容は魅力的で参加しやすいようです。個性を出せる内容に男性の参加者が継続的に参加されていることも特徴的です。

「オリジナルTシャツ作り」「英語でポップスを」「薬膳料理の実習」「コンピューターを使ってみよう!」「ヒノキを使った木工作品作り」など、どのプログラムも自分一人では体験できないことや苦手意識のある内容を参加者同士声を掛け合い、また若い学生さんに手ほどきを受けることなどで楽しく取り組みました。

名古屋女子大学の皆様には参加者の皆さんが楽しく参加できるようプログラムの作成から実施に向けて様々な工夫をしていただきました。「学内マップ」は好評でした。身近である機会がないと入ることので

名古屋市瑞穂保健所 保健師 鈴木朋子

きない大学のキャンパス内をマップを手に学生さんとの交流などとともに楽しむ姿もみられました。

認知症の予防には、アクティブなプログラムを互いに交流をしながら楽しめることが大切だといわれています。また、新しいことにチャレンジすることでワクワクする気持ちを味わうことも効果があるといわれています。教室に参加することで色々な刺激を受け、新しいことに挑戦する機会を得ました。教室が終了してからもチャレンジする意欲を維持している方が沢山いらっしゃいます。「たくさんの仲間ができました。気の合った仲間との出会いがこれからの人生の楽しみの一つになりました。」「若い世代の人と話すことができ気分が若返った」などの嬉しい声や感想をいただいています。今後も大学と協働して開催し、ますますこの事業を発展させていきたいと考えています。



ヒノキを使って木工玩具作り



作ってみよう! オリジナルTシャツ

平成23年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂児童館 交流事業を終えて

名古屋市瑞穂児童館 竹村由希

平成21年3月に瑞穂児童館は現在の場所に移転し、その年から名古屋女子大学との交流事業が始まりました。

手さぐりで始まった交流事業も、回数を重ねる中でより多くの方に認知していただけるようになり、昨年度は早い時期からクリスマス会の開催を楽しみにしている方がたくさんいらっしゃいました。

児童館は乳児から高校生が利用できる施設です。児童館の中では子どもと職員と保護者などの大人しか存在していません。その中で大学生は、年齢や体は大人ですが、職員や親よりも子どもたちに近い存在です。子どもたちにとって大学生との交流は、大人とは違った世代との交流となり、普段職員には見せないような甘えや笑顔を見せていました。また、参加していた学生にとっても、実際に子どもたちと接することで、将来の自分をより想像できたようです。交流事業に参加した後に、児童館のボランティアとして事業に協力し

てくださる学生が年々増えています。

保護者の方からも、学生の丁寧な指導や笑顔をみて安心して参加できたとの声を多くいただきました。

児童館ではなかなかできない（調理室を利用した）大掛かりなクッキングは、回を重ねるごとに参加希望者が増加しています。保護者に向けた講座やクリスマス会も、学生と一緒に子どもを見てくれたことで、きょうだい連れでもゆったりと参加ができたようです。

近年、公園遊びや集団遊びが減り、大人も子どもも異年齢の交流が少なくなっています。その中でこの交流事業は、子どもたちにとっても参加した学生にとっても、たくさんの刺激と経験になりました。今後も交流事業を通して、児童館ではできない経験と異年齢の交流を行っていききたいと思います。



楽しいパン作り



子育てグループ教室



クリスマスイベント「劇を見て楽しみましょう」

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究6」

～『学士力』育成のための教育方法の検討～

氏原陽子・神山久美・白井靖敏・清道亜都子・遠山佳治(代)・羽澄直子・原田妙子・幸順子

本研究は、平成13年度から研究所機関研究として継続しています「大学における効果的な授業法の研究」（1 情報教育、2 語学教育、3 教養教育、4 初年次教育、5 評価方法）の一環として位置づけられ、今年度の平成24年度～平成26年度の3年間かけて行う研究です。

平成20年12月の中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」において、大学教育の質保証の観点から「学士力」という表現が使われています。大学進学率の上昇にともない、多様な学生に対応した教育課程として見直す必要性が出てきました。答申のいう「学士力」、すなわちジェネリックスキルの育成は、単に教室で

行う座学中心の授業だけでは育成しにくい面があり、企業や社会との連携で進むPBL教育（課題解決型学習・問題解決型学習）、インターンシップやボランティア活動、校外実習等と連動させていくことで効果を発揮します。そこで、本学学生を対象とした「学士力」育成のための教育方法を検討し、本学の授業改善に応用可能で、有用性のある実践的研究を行っていきます。

なお1年目の今年度では、本学における状況を把握するため、教員へ「学士力育成のための授業実践に関する調査」（仮称）を実施したいと考えております。

(文責：遠山 佳治)

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～女性をめぐる教育と政治の相互関係（19世紀～20世紀前半）～

石倉瑞恵・氏原陽子・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子(代)・吉田文・依岡道子

平成24年度の本機関研究は、第四期（平成23年～24年）の最終年となります。新たなメンバーを迎え、これまでに積み重ねてきた研究内容をさらに深めていく所存です。

昨年度の研究テーマは「女性をめぐる教育と政治の相互関係」（19世紀～20世紀前半）でした。教育者であり政治家でもあった越原春子先生は、日本初の女性衆議院議員在任中に教育問題の審議に加わっています。研究会議では、春子先生の教育者としての視点や思想が政治活動にどのように反映されているかを資料などで確認した後、研究メンバーが各専門地域の歴史や事情をふまえ、春子先生

とはほぼ同世代の女性教育者と政治の関わりについて発表しました。教育を受け社会意識の高まった女性たちの参政権運動についての国際比較も行いました。

今年度は、昨年度のテーマを継続し、「女性の政治教育」を中心に研究を進める計画です。政治は女性の関わる領域ではないという考えは洋の東西を問わず根強く、現在もそれが払拭されているとは言い難いのですが、歴史のなかで政治を志す女性たちが教育に何を求め、また何を得てきたかなどを春子先生の政治活動をふまえながら探っていききたいと思います。

(文責：羽澄 直子)

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」

～遊びの中の学びⅡ～

幼児保育研究グループ

今年度も、昨年度に引き続き、幼児期の独自性を踏まえて、「遊びの中の学び」に焦点をあて、3カ年計画の2年目として本研究を進めています。

昨年度は、「学び」がどのように芽生え育まれているか実態把握した結果、5つの視点に焦点をあて「遊びの中の学び」を捉えることができました。①自然からの学び、②創造活動からの学び、③異年齢との遊びを通しての学び、④ごっこ遊びからの学び、⑤運動遊びからの学びとなります。また、様々な遊びの中で、配慮すべき環境の課題も明らかとなりました。

5月の第1回幼児保育研究会では、今年度も継続して子どもを取り巻く環境としての教師の役割を含め、環境を工夫していくこと。また、新年度クラスが変わったことで、前年度の遊びの体験がどのように発展していくか。同学年の横のつながり、異年齢の縦のつながりの中で、遊びの伝承、模倣がどのようになされ発展していくのか。遊びの深まりに注目し、教員同士の話し合いを継続して実施することによって、遊びの中の学びを明らかにしていくことが必要であると確認できました。（文責：森岡 とき子）



研究会

機関研究

「中学生の学力向上に関する研究」

～主体的な学びを促す授業の研究——「学ぶ」楽しさを実感できる授業展開のあり方——～

中学校学力向上研究グループ

昨年度は「主体的な学びを促す基本的指導技術の向上」を年間テーマに、それぞれの教員が年間テーマに基づく個々の研究テーマを各自で設定し、1年を通じてさまざまに工夫を凝らした実践を積み重ねることができました。しかし、こうした研究の進め方は、ともすれば個人研究に終始しがちであるというところが課題として残りました。

授業における基本的指導技術というものは、教員である限り常に取り組み続けなければならない至上命題であり、生徒が学習に対して前向きに取り組めなかったり、学習内容の定着が希薄であったりするといった問題の根源は、この基本的指導技術が不足しているためだと言っても過言ではないと考えます。

そこで、この点については今年度も引き続き研究を進めるものとしました。ただし、昨年度の活動の反省をふまえ、全体でポイントをはっきりと絞った研究活動にするべきだと考え、特に授業における「展開部分」を中心に全体で研究を進めるものとしました。

大きな研究活動の流れとしては以下の6つを柱に進めます。

①テーマに基づく授業実践、②授業実践レポートの作成、③研究授業・公開授業、④研究会、⑤夏期研究合宿、⑥研究発表会

今年度の研究テーマのもと、個人レベルでテーマに基づく授業実践を積み重ねていきます。

（文責：福田 誠）



研究会議

機関研究

「高校生の学力向上に関する研究」

～思考力を高める授業のあり方～

高等学校学力向上研究グループ

高校生の学力向上を目指し、総合科学研究所と連携した研究活動も今年度で6年目を迎えました。私たちが研究に取り組むきっかけは「学力を向上させる」ということから始まっています。学力は一つひとつの課題に対して深く思考しながら向き合うことを重ねることで、向上するものです。そしてその状況をつくり出すために、私たち教員は授業を多角的に捉え、ひとつの授業の中にたくさんの「しかけ」をつくるのが大切なのではないかと考えました。いろいろな角度から生徒たちに迫り、生徒たちの中から自然に湧いてくる「考える」活動を積み重ねることにより、結果的に「思考力」を鍛えることにつながるのだと思います。そこで、各教科の特性を考慮しながら「思考力を高める授業のあり方」を深めるために、昨年度から引き続きテーマに掲げて進めることとしました。

昨年度は理系科目に特化した研究授業として、理科と数学の思考力を高める授業のあり方について取り組みました。本年度は、国語と外国語の2教科について全教員参観型の研究授業を公開する予定です。なお、公開授業後は本校教員と大学の先生方による研究協議を行い、高校生の学力向上につながる授業のあり方について模索していきたいと思っております。（文責：野中 知里）



研究授業

プロジェクト研究

「実験を取り入れた参加型理科教育の推進に関する研究(その2)」

市原千博・宇野民幸・吉川直志(代)

平成23年度プロジェクト研究「実験をとり入れた参加型理科教育の推進に関する研究」において、「物理・科学がおもしろい」と実感させることを目標として、実験を取り入れた授業の展開を実践しました。大学の理系授業において効果的に実験を取り入れる方法とそのコンテンツを研究することで、文系の学生に対しても参加型理科教育の必要性を強く感じるに至りました。今年度のプロジェクト研究では、これまでの研究をふまえて、引き続き「ありきたりの材料で新鮮な感動を与える実験」を授業に取り入れることを目標

として、避けられがちな物理の授業において、「物理のおもしろさ」を伝える実験を取り入れた参加型授業の方法とそのコンテンツのさらなる拡充を目指します。現在、研究メンバーが担当する後期の理系授業での実践に向けて、実験を取り入れた参加型授業の方法および新しいコンテンツの検討を行っています。後期の授業での実践における学生の反応とその後の調査を含め、授業間で連携と相補的な実験を取り入れた授業展開の手法の構築を目指し研究します。

（文責：吉川 直志）

平成24年度「開かれた地域貢献事業」

本研究が推進する名古屋市の公共施設と展開している交流事業「開かれた地域貢献事業」も7年目を迎え、毎年、大学ならではの講座になり、知的で個性が表現できる内容でよかったとの好評価をいただいております。今年度も学内公募で本地域貢献事業への参画を先生方にお願ひし、充実した企画が採択されました。

まず、名古屋市瑞穂児童館との交流事業は、平成24年10月から25年3月までに、児童館祭りのイベントを含めて、保育・教育、栄養・生活関係の8つの講座を開催します。

さらに、12月の児童館クリスマスイベントとして6つの楽しい企画を行います。これらは、文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部保育学科・生活学科の教員と学生の有志、名古屋

屋女子大学同窓会「春光会」および総合科学研究所教職員が協力して実施いたします。

次に、瑞穂保健所との交流事業はリピーターも多く、平成24年9月から25年2月にかけて、65歳以上の高齢者を対象とした「若返り教室キラキラコース（平成24年度認知症・うつ予防教室）」を支援する形で、5つの企画を行います。これらは文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部生活学科の教員と学生の有志、および総合科学研究所教職員が協力して実施いたします。

今年度も、名古屋市瑞穂児童館と名古屋市瑞穂保健所とで、より充実した地域貢献を推進・発展させてまいります。

(文責：原田 妙子)

講演会のお知らせ

演題 キャリア教育の現状と展望

日時 平成24年9月20日(木) 10:30~12:00

場所 学校法人越原学園 越原記念館ホール

講師 宮崎 冴子 氏 (三重大学学生総合支援センター特任教授)



近年の社会・産業構造の変化に伴い、大学教育の質的転換が求められています。これからは学生自身がキャリア形成・能力開発をして社会的・経済的に自立し、社会に貢献していく力をつけることが重要です。いま大学に求められている「キャリア教育」について、長年にわたって携わっていらっしゃる三重大学学生総合支援センター特任教授の宮崎冴子先生にお話を伺います。講演会では、なぜキャリア教育が必要なのか、世界の歴史的背景を紐解きながらお話させていただきます。さらに、実際に宮崎先生が実践されているキャリア教育の方法や内容についてご紹介いただき、本学園の教職員として必要な学生指導のあり方についてもご講演いただけます。

略歴

文教大学大学院人間科学研究科生涯学習学(学術修士)修了、東京経営短期大学教授・生涯学習センター長(創設)、宇都宮大学教授・キャリア教育センター長(創設)、キャリアカウンセラーを経て現職。

文部科学省社会教育アドバイザー、文部科学省地域・学校支援推進アドバイザーも継続中。

著書

『21世紀のキャリア開発』『キャリア形成・能力開発「生きる力」をはぐくむために』『社会教育・生涯学習—学校と家庭、地域をつなぐために—』：文化書房博文社、『21世紀の生涯学習—生涯発達と自立—』理工図書、『若者のためのキャリアプランニング—すばらしい未来を拓くために—』『バリバリと働きたい人のためのキャリアプランニング』『キャリア教育—理論と実践・評価—』：雇用問題研究会、他多数。

今年度運営委員

委員長

原田 妙子
HARADA Taeko
(短期大学部)

伊藤 充子
ITO Mitsuko
(文学部)

辻原 命子
TSUJIHARA Nobuko
(家政学部)

羽澄 直子
HAZUMI Naoko
(文学部)

宮澤 秀治
MIYAZAWA Shuji
(短期大学部)

研究所メンバー

所長

竹尾 利夫
TAKEO Toshio

顧問

河村 瑞江
KAWAMURA Mizue

主任

渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

講師

越原 もゆる
KOSHIHARA Moyuru

職員

寺島 まり子
TERASHIMA Mariko

編集後記

ここに総合科学研究所だより15号をお届けします。執筆にご協力いただきました先生方に感謝申し上げます。本号では、最近の研究成果や活動・現在進行している研究内容などを報告させていただきました。

ある雑誌で「災害復興学」という新たな学問が立ち上がったことが記事になっていました。従来の学問分野の壁を越えた情報のデータベース化や災害時の対処法などを研究対象とする学問のようです。このように、物事の本質を追究するには、今後ますます総合的に科学をとらえる視点が重視されるのではないのでしょうか。その意味でも、総合科学研究所の活動にご理解とご協力をお願いいたします。

文責：渋谷 寿